

沼津市 山 小 水 記 念 館

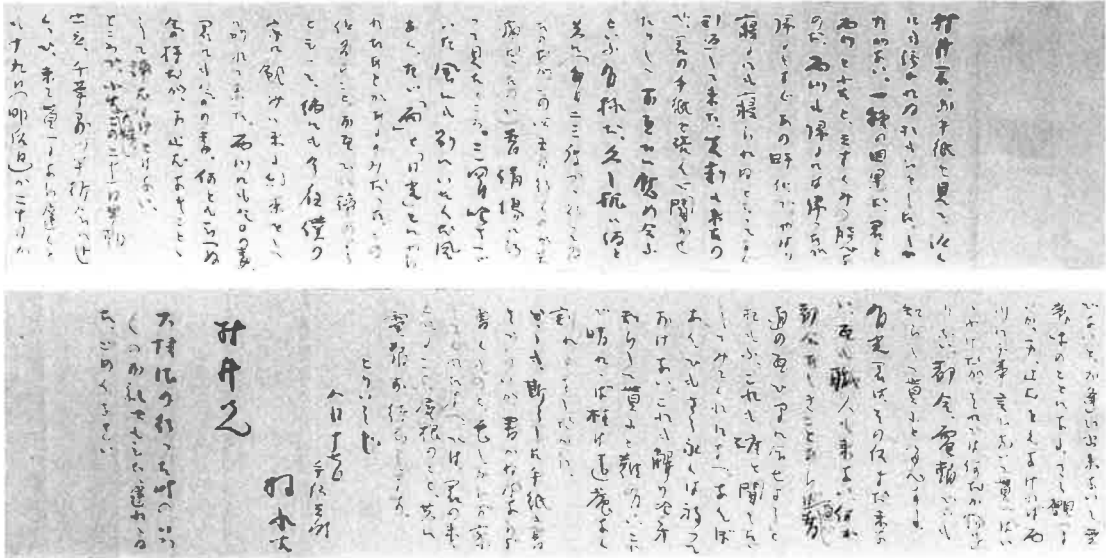
第 8 號

1992.3.31

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

Tel(0559)62-0424



村井武宛書簡(大正十三・八・十七)

牧水が沼津永住を決めて土地購入に踏み切ったのは大正十四年二月初旬である。場所は沼津市本字南側六十一番地、千本松原の一角にあって通称市道と呼ばれている、もともと桃畑として使っていたところだ。富士山を背景に松原を庭に見立てるほどの、牧水にとっては絶好の土地であった。約五百坪の面積に坪二十円の値が付いていたが、交渉の結果坪十六円になり、総額七千二百九十六円で買い取っている。交渉は万事弟子に任せであった。沼津の御厨銀行の行員で創作社社友の若い長倉汀峯(後の沼津市長長倉宜一)が、てきぱきと処理したようである。建築技師は幼なじみの村井武、施工は土肥の大工西川百之助が当たった。こうして牧水念願の「夢想の家」は実現の運びに至ったのだ。

地鎮祭を四月一日に済ませた後、続いて木取りを終わらせた木材が七月二十八日の夜明けになって千本浜に到着した。上棟式は予定通り八月四日に行われた。八月十四日付け、村井武宛のこの書簡は、現場で作業が始まって間もないときのものである。その慌ただしい文面からみて工事にトラブルが生じたのだ。

みんなでの対応に苦慮している様子を騒然とした筆致で伝えている。つまり、清水の瓦工場に向け先に特別発注した瓦が納期通りに到着しない、屋根を葺くことが出来ないのだ。そんな時生憎沼津地方にかなり強い暴風雨が襲った。建てかけの家屋は水浸しになり、放っておけない事態になった。事態を打開しようとして牧水は珍しく慌てているが、対応の手だてが無いらしい。とにかく早々に来てほしいと村井の来訪を頼み込んでいる。牧水のせっぱ詰まった表情が眼に見えるような文面である。

村井君、お手紙を見て、泣くにも泣かれぬおもひをした、しかたがない、一種の因果だ、君と西川と小生と、三すくみの態なのだ、西川も帰るには帰ったが、帰るとすぐあの時化で、やはり寝るにも寝られぬと云って、すぐ引返して来た、先刻も来たので、君の手紙を読んで聞かせたりして、お互ひに慰め合ふといふ有様だ、(中略)

どうも、斯うした手紙も書きづらいが、書かねばならず書くものと、悪しからず察してくれたまへ、では、君の来てくれること、屋根のこと、共に電報お待ちします、とりたいぞき

(本書簡はこの度、株式会社増進会出版社から社団法人沼津牧水会へ寄贈された新しい資料です。同社は今度、大岡信、佐々木幸綱、当館館長若山旅人の三氏の監修により「若山牧水全集」全十三巻を刊行することになりました。)

(上田治史)

「第二回 中学生短歌コンクール」

入選

(三十首)

募集期間 平成三年九月二日～九月三十日
展示期間 平成四年二月十一日～二月二十三日

若山牧水記念館ラウンジ

募集総数 四百三十八首(二百七十九人)

入選作品 特選 十首・入選 三十首

特選

(十首)

大小屋で背中まるめてふるえる台風の夜の子犬と子猫
片浜中 野口 恭代
雨降ると辺りがひやりとはりつめて海の香りがさわやかに香る
片浜中 廣瀬 有佳
たった三分竹刀に思いうちこめて三年間の終わりがたり
片浜中 佐藤 香奈
流れ星頭をよぎる願い事となえる頃はもう消えている
第二中 渡辺 麻実
しとしと秋の夜ながにふる雨は虫のねいろとまच्च
片浜中 加藤美智子
ちするかな
学校の帰りがおそいとまっくらで秋がきたなとはじめて思う
長井崎中 杉山 典子
ひがんばなこしもしもさいたあかいはなたちばなさいがちかづいてくる
長井崎中 真野 貴代
りんどうの色がきれいと言くまではわたしは秋に気づかなかった
長井崎中 後藤久美子
いつからかあなたをひとめ見るために今日も立つてるグラウンドの隅
長井崎中 川合 裕子
暗い道のむこうに見える一つの灯包まれたくて急いで歩く
浮島中 土屋沙矢香

青い葉に光を浴びてゆらゆらと風うけ揺れるたちあ
おいか
第二中 渡辺 亜紀
ほくだけの指切りげんまだました君そつとほくからはなれていく
片浜中 佐藤 真也
ビリビリと母がやぶったカレンダー楽しい夏が終わる瞬間
片浜中 萩原 裕理
雨の中スパイク履いてひもしばり緊張の中スタートにつく
片浜中 工藤 文法
木の枝で小鳥が一羽鳴くを見て私もひとり机にむかう
静浦中 今井 明美
海光る船のかげにはうみどりがなまをつれてさわいでる
長井崎中 中田麻友花
あきかぜがふくなかあるくわたしたちもみじがちらりおちてきた
長井崎中 高島由美子
嵐去り高速道路ひた走る田舎の祖父母笑う顔見におはようと声をかけてる先生の笑顔いつでも清しく思う
第二中 新井みどり
見上げれば赤とんぼ舞う秋の空真つ赤に映える夕暮れの街
第二中 鈴木 奈々
森林がなくなりかけて温暖化これでもいいのか地球の未来
片浜中 江本 篤樹
心中に悲しいことがあるたびに人はやさしくなれるんだよと
片浜中 武井 愛
競技場マイクの声も雨にしみトラックを走る友よが
片浜中 笹原 弘乃
数分の舞台のために三年間泣いて笑った日ももう終わる
片浜中 藤井 茜
山の道急なカーブを曲がり切り眼下に広がる雲海と
片浜中 木村 由加

むし暑い夏の夜にはシャワーあびコップ片手にのどを潤す
片浜中 高橋 明
テスト中消しごむがおち足でける時間が過ぎてあせりはじめる
片浜中 増山 真美
こうるさい親にテストを投げつけてみたく思うが頭あがらぬ
片浜中 大嶽むつみ
たくさんの方がいっぱい東京で迷い迷って行くところ知れず
長井崎中 海瀬 宏美
夏が過ぎ観光客がへってきたこれからもつと静かなるかな
長井崎中 大村 純一
さようしつにぼつんとひとつのえんぴつがなみだをながしもちぬしさがす
長井崎中 杉山 志帆
夜になり静まりかえったこの道で兄はまだかと探しつづける
長井崎中 瀬川 伸生
千年の時を経りしも今もなお微動ともせず薬師寺の塔
長井崎中 真野 勇記
みずうみに真赤な夕日かがやいてかすかな光波にゆれてる
長井崎中 山本 桂子
なにげなく昔の写真ながめるととなりで笑うなつかしき祖母
静浦中 小早川尚子
日曜日クイズ番組前にして笑顔こぼれるだんらんのとき
静浦中 増田 麗子
いつもなら寂しい窓にガーベラの赤や黄色の花咲いている
静浦中 遠藤 晶子
心から私の悩みをきく友に素直に言えず涙がポロリ
静浦中 小池 千春
本当に一人が好きかと自分に問う友の帰った部屋に一人で
浮島中 土屋 貴代
夏休みの自由研究に牧水をえらんでではじめてその人を知る
今沢中 石井 充子

講評 (選者による)

へうたを作った君達へ 上田 治史

中学生諸君が歌を作ることに對し、われわれは極めて強い関心を持っています。何故かといえますと、「へうた」というようなものを本気で考えていく場合、その発生のところから始めていくのが一番解り易いし間違いが少ないからです。何故日本に「へうた」があるのか、何故我々はうたうのか、という問いかけに對して最も純粹な、つまり理屈や知恵を超えた本質が裸で露呈していると考えられるからです。諸君の作った「作品」としての歌は、それが誰かの真似であつたとしても、純粹な心の動きだとしたら、或る意味で日本の詩歌の原風景を示しているかも知れないのです。

誰でも知っている事ですが、へうたは必ず集団の中から発生します。人が大勢集まると、そこからほとんど自然発生的に沸き上がる声と言えるでしょう。「大勢の中の私」「私にとつてのみんな」という、人間の根本の問題を、君達の歌は語っています。

中学生短歌を選歌して 須永 秀生

投稿された作品を読んで、一番に感じたのは、素直な学生生活をおくっているなと言うことでした。短歌は短い詩形ですが、その短い言葉の繋がりが、作者の物の考え方・生き方が察せられる不思議な詩形なのです。ですから、真剣に生きれば作品も真摯な姿を写してくれるし、チャランポランに生きていけば、作品も品のないだらしない姿になります。選歌ですが、特選・入選と一応決めはしましたが、その差が際だつてある訳ではありません。四人の選者の集大成の結果で、個人個人の選者の一位はこの順位にはならないようです。たとえば私は一位に「暗い

道のむこうに見える……」を選びました。評価と言う形は、このようなコンクールには相応しくないような気がしながら、選ばせてもらいました。大事なものは、短歌は詩なのだと言うことです。詩でもっとも嫌うのは常識ではないでしょうか。自分自身の感覚を信頼してそれを表現するように心掛けてください。

みずみずしい感受性 川口 和子

入選した歌はもちろん、入選しなかつた歌も、それぞれ個性的で私の心を打つ迫力があり、選をするのは、難しい作業でした。生きてゆく中で、自分の周りを見る目、感じる心が新鮮で若々しく、大変いきいきとした作品が多く見られました。

- ・雨降ると辺りがひやりとはりつめて海の香りがさわやかに香る
- ・人の真似でない、自分の感覚を大切にして、自分の言葉で作歌していて良いですね。
- ・学校の帰りがおそいとまっくらで秋が来たなどはじめて思う
- ・私も勤め帰りに、思いがけず空が暮れているとき、全く同感です。
- ・いつからかあなたをひとめ見るために今日も立つてるグラウンドの隅

作歌の過程を大切に 青木 朝子

このトキメキの心を大切にして下さい。

四百三十八首の作品それぞれに個性があふれていて、中学生らしいみずみずしさに圧倒されました。それだけに四十首に限定選歌することは難事で、しばしばじろぎました。フレッシュな感覚、素朴な心動き、率直な表現等々、どの作品も捨て難く苦しい作業でした。選を終えてつぎの様に思いました。

コンクールに入選することは大変立派なことであられるらしいことです。でも、もっと大切なことは、うま

く出来なくても一生懸命作つたその過程だということとを忘れてはならない。歌うこと＝短歌を作ること、それは自然へのこまやかな目や、自分自身を見つめる確かな目が培われ、より豊かな精神生活を体験出来ることにつながるのではないかと。

どうかこの「短歌との出会い」を大切にしてください。日常のくらしの中で、いつも土(感性)をやわらかく耕して歌う心を育てて行って欲しいと思います。そして又、次の機会にも胸を張って挑戦して欲しいのです。



第38回 沼津牧水祭短歌大会
—春日井建氏講演—

平成三年十月六日に、二百人近くの参加者により行われた会は、第一線で活躍中の春日井建氏の「ことばの力」と題して講演があり、興味深い内容で、聴衆を魅了した。(常盤町自治会館)

第38回沼津牧水祭碑前祭

平成三年十月二十日、沼津市長を始め来賓の方々のご臨席ご祝辞を賜り、参加者も多数、盛大に開催された。



第39回沼津牧水祭の予定

短歌大会
平成四年十月四日(日)
碑前祭・芝酒盛
平成四年十月十八日(日)

平成三年度特別企画展 大悟法利雄遺墨展

——柿田川讚歌に寄せて——

平成三年十二月十七日～平成四年一月十九日

若山牧水記念館ラウンジ

歌人大悟法利雄氏は、大正十一年に沼津で初めて若山牧水に会い、以後若山牧水宅に同居し、「創作」や「詩歌時代」の編集助手として青年期を沼津で過ごしました。若山牧水没後は「牧水全集」の編集をはじめ「伝記編」「新研究」等、数多くの著書を出版して師の顕彰に努め、若山牧水研究者としても不滅の業績を残したのです。当沼津市若山牧水記念館の建設計画にも当初より率先して参画、資料収集のために関係方面を奔走したり、展示に独自の構想を練るなど中心的存在でありました。開館時には病軀をおして初代館長に就任、展示の配列や解説をみずから監修し、完璧を期したのです。

このたびの企画展は、天下の名水柿田川と歌人大悟法利雄との出会いを中心に展示しました。氏は晩年、清水町有志の人達とともにしばしば柿田川を手漕ぎの舟で遡行、湧水噴出のさまをつぶさに観察し、その感動を歌に詠みました。それらは歌集に「柿田川讚歌」四十首として発表され、一部は柿田川公園の歌碑となり、また地元住民の要望に応じて多くの半切等の筆跡として残されたのです。前館長の没後一年に当たり、生前こよなく愛した柿田川湧水への誉め歌を、氏の残された筆跡によって読み、併せてその大いなる生涯を偲び、冥福を祈るべく企画されました。なお、貴重な資料の貸与をこころよく了承されました清水町有志の方々並びに関係諸賢に対し衷心より感謝申し上げます。(上田)

対談講演 大悟法静子——夫を語る——

平成四年一月十二日 午後二時より

若山牧水記念館 会議室

「大悟法利雄遺墨展」開催中の、一月十二日に、大悟法氏夫人静子さんと上田治史氏の対談が、会議室にて開催されました。若山旅人館長をはじめ、沼津市教育長、清水町の町長、議長、教育長などのご臨席を得て、出席者七十名余りの大盛会でした。

上田氏の好リードでの対談は、夫妻の馴れ初めから、夫が最晩年柿田川を愛したことなど、大悟法利雄氏のくらしぶりが明らかに伝えられました。それは取りも直さず、大いなる歌人若山牧水の継承でした。妻の言う夫は、人の良いのぼせ性……。若山牧水先生に心酔した大悟法氏は、だれよりも頑ななくらい忠実に、先生を守り、一研究者より出た信念によって、先生の業績をまとめ伝えようとした人生だったと言えるようです。

そしてまた、さらに印象深かったのは、妻としての静子さんの横顔でした。静子さんの語り口は、対談後、天性のものと評されるように愉快で心をとらえるものでした。けれども、その声には半世紀の間、夫の陰に徹して和歌と牧水と創作社に一筋の純粹な夫を、外力から俗世から守ろうとし、骨身を削り、神経を磨り減らしているうちにさらに勁くなった感の緊張感と迫力がありました。学習塾や編物で生計を立てられたにもかかわらず、苦にすることもなく、また老齢にて足下の覚束無い夫のために、すこしでも怪我の無いように散歩道を平に直したり、自然の草木花をその道端に植えたり、少しでも離れた所にいると呼ぶ声や、ましてくしゃみなどが聞こえ

なくて風邪でも引かせてはと氣遣うなどの話が嫌みなく語られ、やはり女傑かなと思われました。女傑といってしまうと人生が容易になつてしましますが、創作社の結末のために奔走している大悟法利雄氏の履いていたのは、破れ靴。その破れ靴に惚れて、夫を九十二歳まで守り続けた静子さんは女傑になつていったと言えらると思います。終始、素敵なことと感じたのは、豪快ともいえる笑いや語り口の中に、深い愛情のそっくりそのまま夫を亡くした寂しさが見え隠れするけれども、けつして陰気ではなく真昼のように乾いた静けさを感じられたことでした。鍛えられた精神の美しさを、見せて頂いた様に思われました。大悟法利雄氏の若山牧水先生への心、静子さんの夫への思いというもの。そして、それらを全うしたこと。良き人生を見せて頂きました。

後日、静子さんの御宅に伺つたおり、静子さんは、「わが娘も、自分の夫に命令するのでびつくりする」とおっしゃいました。(五十嵐)

「第四回雑の歌会」

平成四年三月七日(土)

若山牧水記念館 会議室

詩田さくら子氏を講師に招いての、「第四回雑の歌会」は、七十一首の応募に、六十名余りの出席者によって開催された。先生のコまやかな人柄にて、たいへん和やかな会となった。

後記

本号の発刊のたいへん遅れたことをお詫び申し上げます。(事務局)